オール沖縄で
医師のキャリアを考えるマガジン

Muru Uchina

ムルウチナー

2018 Summer Vol.06

Take Free
ご自由にお持ちください

Top Interview

沖縄の医療の明るい未来のために。

沖縄県病院事業局
我那覇　仁 局長

Muru Uchina

ムルウチナー

オール沖縄で
医師のキャリアを考えるマガジン

沖縄で活躍する医師たちを通して

沖縄の医療と臨床研修の魅力を紹介するマガジン『ムルウチナー』。

『ムル』は全部、『ウチナー』は沖縄を意味します。

島の人々の健康を守るためには

地域住民との“信頼関係”と地域医療機関との“連携”が必要不可欠です。

医療の本質と島の未来を見つめ続ける沖縄県の医師たちの

『ムルウチナー』を感じていただけたら幸いです。

2018 Summer Vol.06

INDEX

P.02
Top Interview
沖縄の医療の明るい未来のために。
沖縄県病院事業局
我那覇　仁 局長

P.05
Hospital Review
北部地区医師会病院

P.06
Sunset of the Island
沖縄ドクター物語

P.10
OKINAWA Residents Story
南部医療センター・こども医療センター
山城　俊樹 先生

P.12
OKINAWA DOCTORS SCENE

#01
伊江村立診療所
阿部　好弘 先生

#02
南部医療センター・こども医療センター
中矢代　真美 先生

P.16
Muru Uchina Test
ムルウチナー検定

Top Interview

沖縄の医療の明るい未来のために。

沖縄県立南部医療センター・こども医療センターの院長などを歴任し、沖縄の小児集中治療や小児心疾患治療の発展に尽力してきた。2018年4月1日、沖縄県病院事業局の局長に就任。沖縄の未来の医療をつくる、大きな舵取りを任された我那覇仁先生が送る、医学生と若い医師たちへのメッセージ。

INTERVIEW

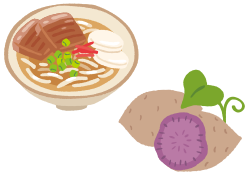
沖縄県病院事業局

我那覇　仁 局長

Hitoshi Ganaha

沖縄県那覇市出身。1976年、千葉大学医学部卒業。沖縄県立中部病院、国立小児病院（現・国立成育医療研究センター）麻酔科を経て、カナダのHospital for Sick Childrenに、集中治療、循環器科のクリニカル・フェローとして留学。帰国後、沖縄県立中部病院、沖縄県立南部医療センター・こども医療センターにて、沖縄県における小児集中治療や小児心疾患治療の発展に尽力する。2012年に同センターの病院長。2018年4月1日より、沖縄県病院事業局長に就任。

沖縄県病院事業局
我那覇　仁 局長
Hitoshi Ganaha



沖縄県の医療基盤と充実した未来の医療をつくる

２０１８年４月１日、沖縄県立南部医療センター・こども医療センターの前院長である我那覇仁先生が、沖縄県病院事業局長に就任した。

沖縄県には６つの県立病院と16の附属診療所があり、県内医療機関に占める県立病院の割合が全国平均と比べて高いことが特徴的だ。その理由は、沖縄が日本国に復帰した当時、人口増による医療需要に迅速に対処するため、県立病院主導の医療提供体制が推進されてきたからだ。県立病院は沖縄の医療基盤をつくり、県立病院の発展なくして沖縄の医療の発展はなかったといっても過言ではない。

この県立病院群を統括している機関が沖縄県病院事業局であり、我那覇先生はそのトップである局長として、救急、小児・周産期、離島・へき地、精神などの政策医療の充実、そして医師確保や人材教育、働き方改革の推進、さらに経営健全化に向け、職員の先頭に立って取り組んでいる。

我那覇先生は、沖縄における小児の集中治療や心疾患治療の黎明期を支え、発展させてきた経歴を持つ。那覇市出身で、千葉大学を卒業後、アメリカ式の実践的なスーパーローテート研修をしていた沖縄県立中部病院で医師をスタートした。

「小児科を回ったとき、子どもは些細なことで容体が急変しやすく、また最適な治療を行えば目に見えて良くなり、大きなやりがいを感じました。それに、当時は小児の心臓手術が沖縄県内でほとんど実施されておらず、なんとかしたいと思ったんです」

こうして我那覇先生は小児科の道に進み、国立小児病院（現・国立成育医療研究センター）などで研鑽を積んだ後、カナダのトロント大学医学部の小児病院に留学して、小児集中治療と循環器医療を徹底的に学んだ。

世界の医療を経験し、広い視野と新しい目を養う

留学先では今までに経験したことのないトレーニングが待っていた。

「カナダでは、引き継ぎにおいて患者さんの状態が良くなったかどうかが重視され、『昨日より今日、朝より夕方に患者さんが良くなっていなければ入院している意味がない。良くならないのは治療法に何かが欠けているか、努力が足りないのだ』と教えられました」

さらに、ＰＩＣＵ（小児集中治療室）にはありとあらゆる症例、しかも重症の子どもたちがやってきた。しかも、日本と異なりＣＴなどの検査が簡単にはできない。カナダでは検査が必要かどうかを最初に判断することを求められた。

「検査は不要であるという決断には、あらゆる症例に熟知し、鑑別診断力があり、自分の医療に自信がなければできません。さらに、カナダでは常に他職種による多くのスタッフでディスカッションが行われており、いろんな意見を聞くことで、最短距離で最適な医療が提供できることを学びました」

帰国後、我那覇先生は沖縄県の小児医療に大きな改革をもたらした。我那覇先生は県立中部病院に戻り、小児の集中治療と心疾患治療の第一線で活躍。これまで本土に外科的治療を委ねていた多くの心疾患治療が沖縄県内で実施されるようになった。

Q. 我那覇局長にとって沖縄とは？

A. 大きなポテンシャルの在る場所

沖縄県病院事業局
我那覇　仁 局長
Hitoshi Ganaha

沖縄の医療の明るい未来のために。

「若いうちに海外に出て世界の医療を経験し、新しい目で物事を見る広い視野を養うことは、長い医師人生のなかで大いに意義があります。そのためには語学、特に英語力が重要であり、学生時代から英語をしっかり学ぶことが大切です」と、我那覇先生は海外留学と英語力の大切さを強く説く。

　我那覇先生は、これまでの経験を活かしながら医師教育にも尽力してきた。我那覇先生が若い医師たちに教えてきた、医師としての大切な基盤がある。

「常にワーストシナリオを想定して治療にあたることが大切。何ががおかしいという感覚を持つことが重要で、たとえば小児科では『何かいつもと様子が違う』という親の観察は真摯に受け止めなければいけません。また、病歴と理学所見は重要であり、最低限の検査や単純写真で判断できる力を養ってほしいですし、鑑別診断では、稀な疾患よりもプライオリティーの高いものを常に診断のトップに多く挙げられることが大事です。そしてどの専門科に進もうとも、常にジェネラリストでいてください」

できないのではなく、どのようにすればできるのか

　我那覇先生は、2006年、南部医療センター・こども医療センターの開設に伴い、循環器科部長、母子センター長としてセンターに異動した。2012年には院長に就任し、全国で10施設目となる「小児救命救急センター」への指定やPICUの増床などを実現。患者数は増加し、医師やスタッフたちの経験値も増え、それに伴い医療の質も向上していった。また、臨床研修委員会を立ち上げ、ハワイ大学への研修留学、県立病院間や琉球大学とのコラボレーションなど、若い医師たちへの充実した教育環境の実現にも力を注いできた。

　そしてセンターの院長を定年退職した2年後、今度は沖縄県病院事業局長という、さらなる大きな船の舵取りを任されることになった。

「県立病院の使命は良質の医療を県民に提供すること。しかし、経営の安定化なくして良質の医療はありえません。医療の質と財務は車の両輪であり、経営健全化に向けた改革は重要な取り組みです。課題は多いですが、日々、社会が変化するなかで、現状維持は後退と同じです。できないのではなく、どのようにすればできるのか、みなの知恵を合わせれば課題は必ず解決できると信じています」

　我那覇先生には、常に心に留めている言葉がある。フランスの小説家プルーストの〝発見の旅とは、新しい景色を探すことではない。新しい目で見ることなのだ〟という言葉だ。我那覇先生は、これまで広い視野でさまざまな改革をしてきた経験を活かしながら、新しい目をもって、明日の沖縄の医療を支える若い医師たちのためにも課題解決に立ち向かう。1950年生まれの現在68歳。その瞳は多くの夢を抱いた若者のように輝いている。我那覇先生の目には、沖縄の医療の明るい未来が映っているに違いない。

北部地区医師会病院

Hokubu Ishikai Hospital

北部地区医師会病院は、沖縄県の全面積の4割近くを占める北部地域を支える中核病院です。診療の主な柱として、救急、がん、生活習慣病、健診などに力を入れ、特にがん診療のレベルは県内有数であり、紹介患者が多いことも特徴です。

当院では、〝ひとりの患者さまを病院全体でみていく〟というスタンスのもと、診療科の垣根を越えたチーム医療はもちろん、医師、看護師、コメディカル、さらに事務スタッフとの間にも垣根がなく、それぞれがプロフェッショナルとして平等に意見を言える環境にあります。スタッフ一人ひとりが日々の仕事にやりがいを感じ、幸せでなければ、患者さんに満足度の高い医療を提供することはできません。スタッフの気持ちを尊重した職場づくりを追求することで、医療の質も上がると考えています。

こうした環境は、研修医の先生方にとっても大きな魅力だと思います。当院では病院全体で研修医を育てる風土があり、また、研修医は少人数のため一人ひとりにきめ細かなフォローを可能としています。医師の半分以上が県外出身で学閥などは存在しませんし、医局は全診療科が同室で、相談や情報交換、カンファレンスが日常的に行われており、常に幅広い知識を吸収することができます。また、保育所を完備し、出産・育児・介護などに応じた多様な働き方も可能です。さらに診療に専念できるよう医師事務作業補助者（MA）を配置するなど、とても働きやすい環境となっています。当院でなら、一人ひとりの希望、適性、ペースに合った研修で、目指す目標に向かってレベルの高い自己研鑽を積むことができるでしょう。

病院には設立母体のさまざまなタイプがあり、研修後は視野を広げるために、いろんな現場で研鑽を積んでほしいと思います。医師になれば壁に突き当たることもあるでしょう。そんなときは、自分はなぜ医師になったのか、医師としての使命を常に再確認しながら研鑽に励んでください。

Interview

病院長

諸喜田　林 先生

Hayashi Shokita

医師会長	上地 博之
設立年月日	1984年 （社団法人 北部地区医師会立 成人病検診センターとして設立）
診療科目	消化器内科、消化器外科、整形外科、呼吸器･感染症科、乳腺外科、リウマチ科、内分泌代謝科、病理診断科、皮膚科、放射線科、麻酔科、救急科
職員数	581名　※2018年7月現在
病床数	200床（一般病床）
外来患者数	201.3名／日
入院患者数	172.7名／日 （2017年度実績）

ゆいまーるの“こころ”で支える地域医療

［理念と方針］地域医療への貢献

1. 患者の気持ちを尊重した医療を目指します。
2. 職員の気持ちを尊重した職場作りを目指します。
3. 会員の気持ちを尊重した高度医療を目指します。
4. 地域に開かれた健全な経営を目指します。

公益社団法人北部地区医師会

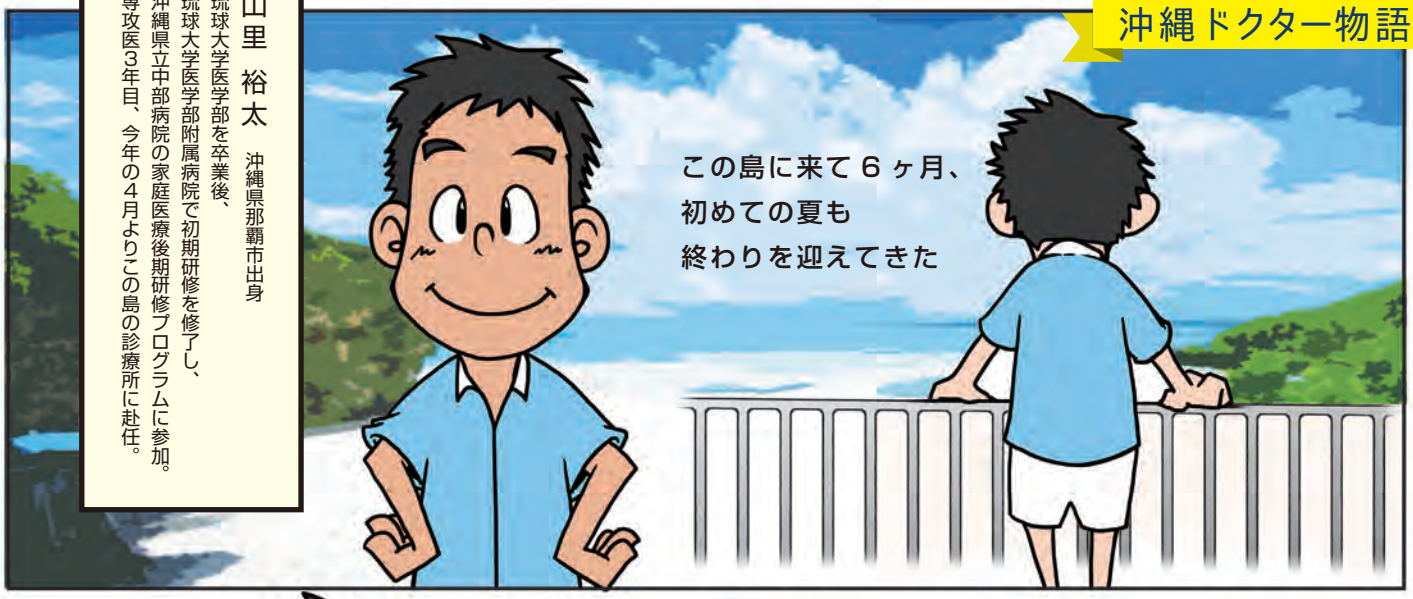
北部地区医師会病院

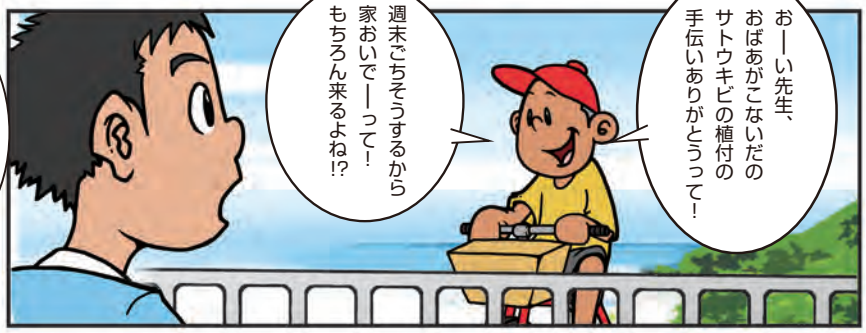
〒905-8611 沖縄県名護市宇茂佐 1712-3
電話　0980-54-1111（代表）
http://hokubuishikai.com/

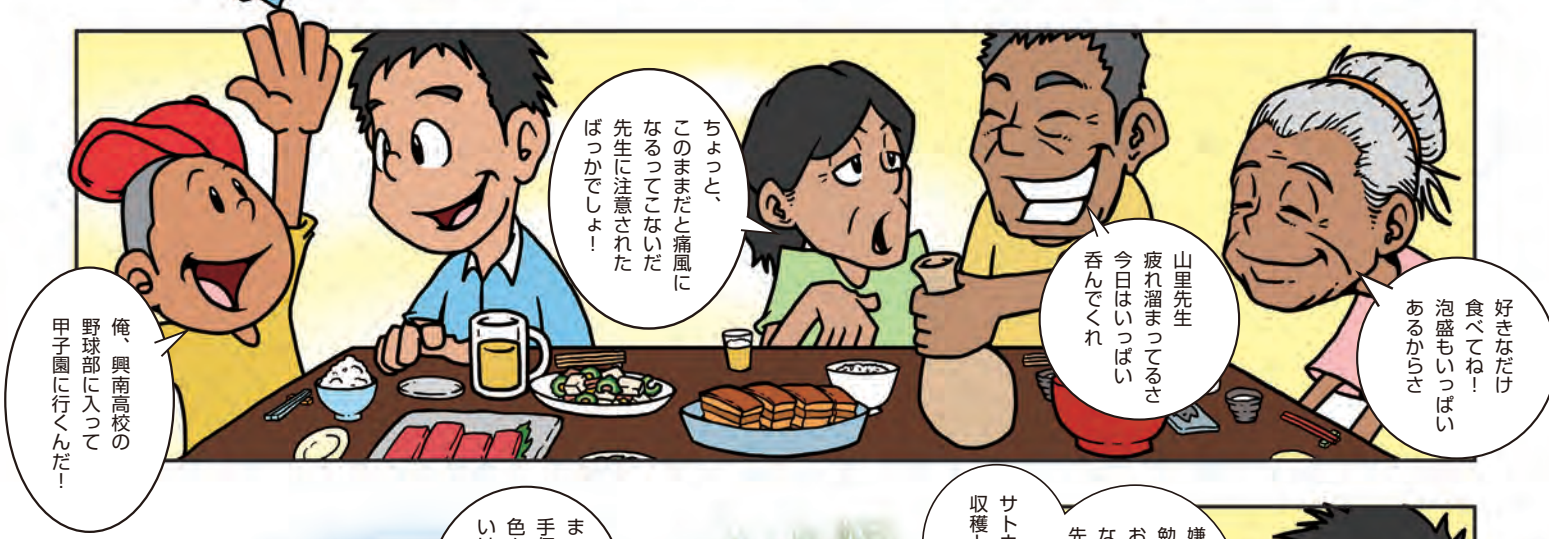
Sunset of the Island

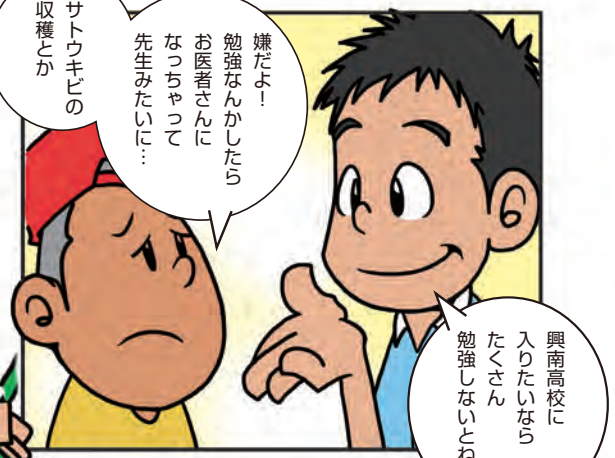
沖縄ドクター物語

山里 裕太　沖縄県那覇市出身
琉球大学医学部を卒業後、
琉球大学医学部附属病院で初期研修を修了し、
沖縄県立中部病院の家庭医療後期研修プログラムに参加。
専攻医3年目、今年の4月よりこの島の診療所に赴任。

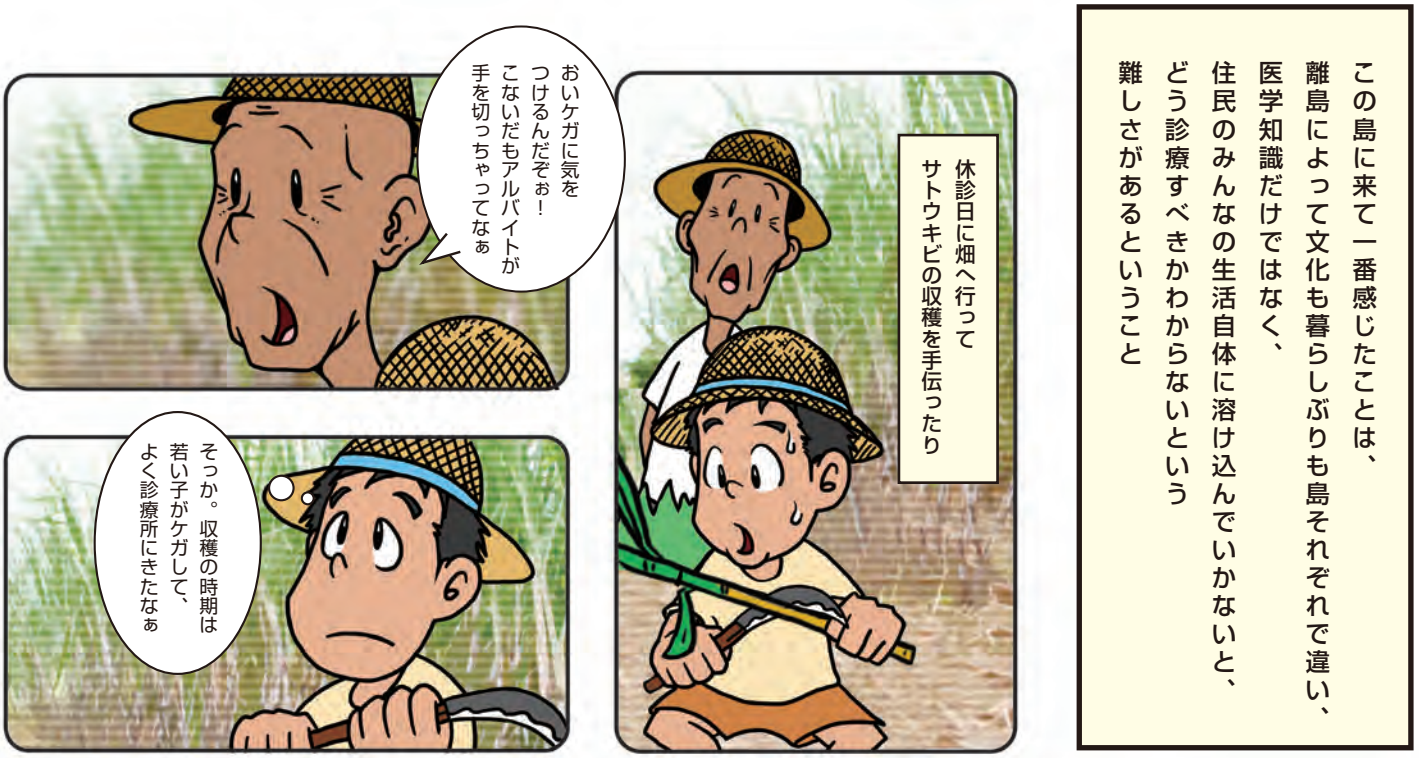


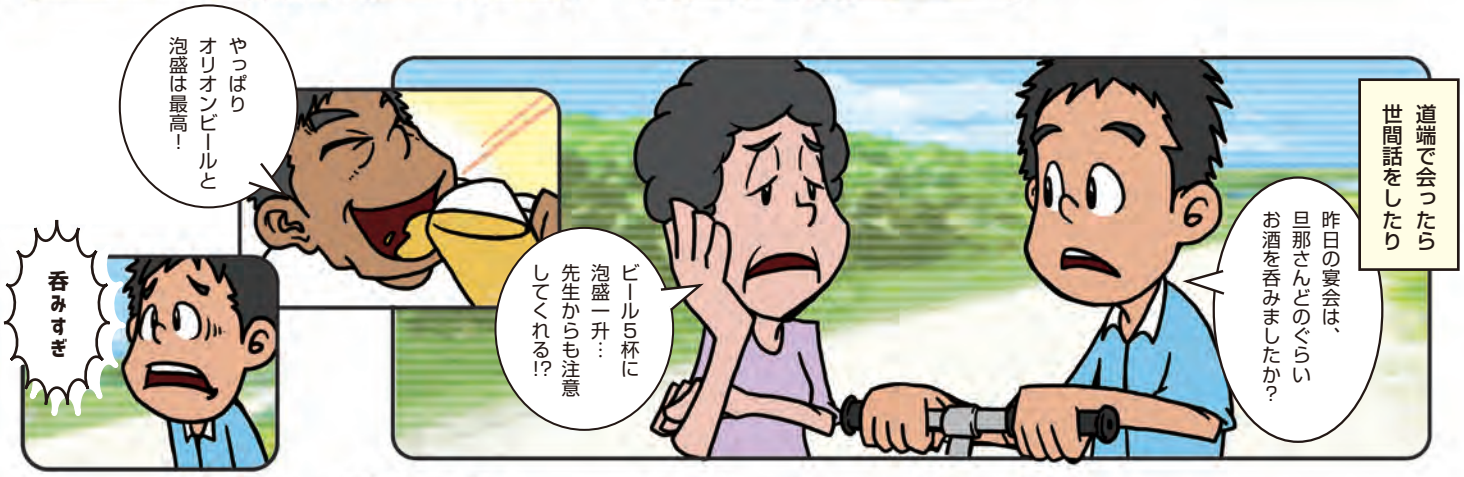


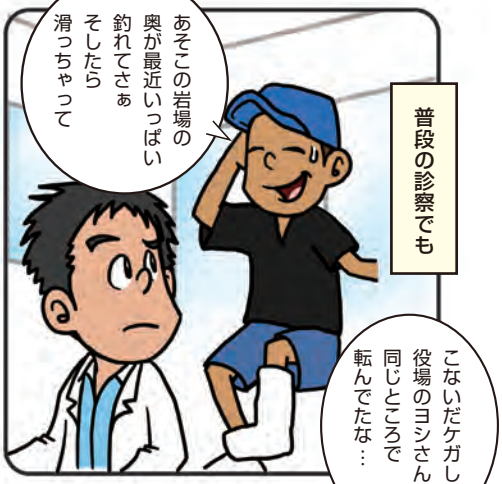




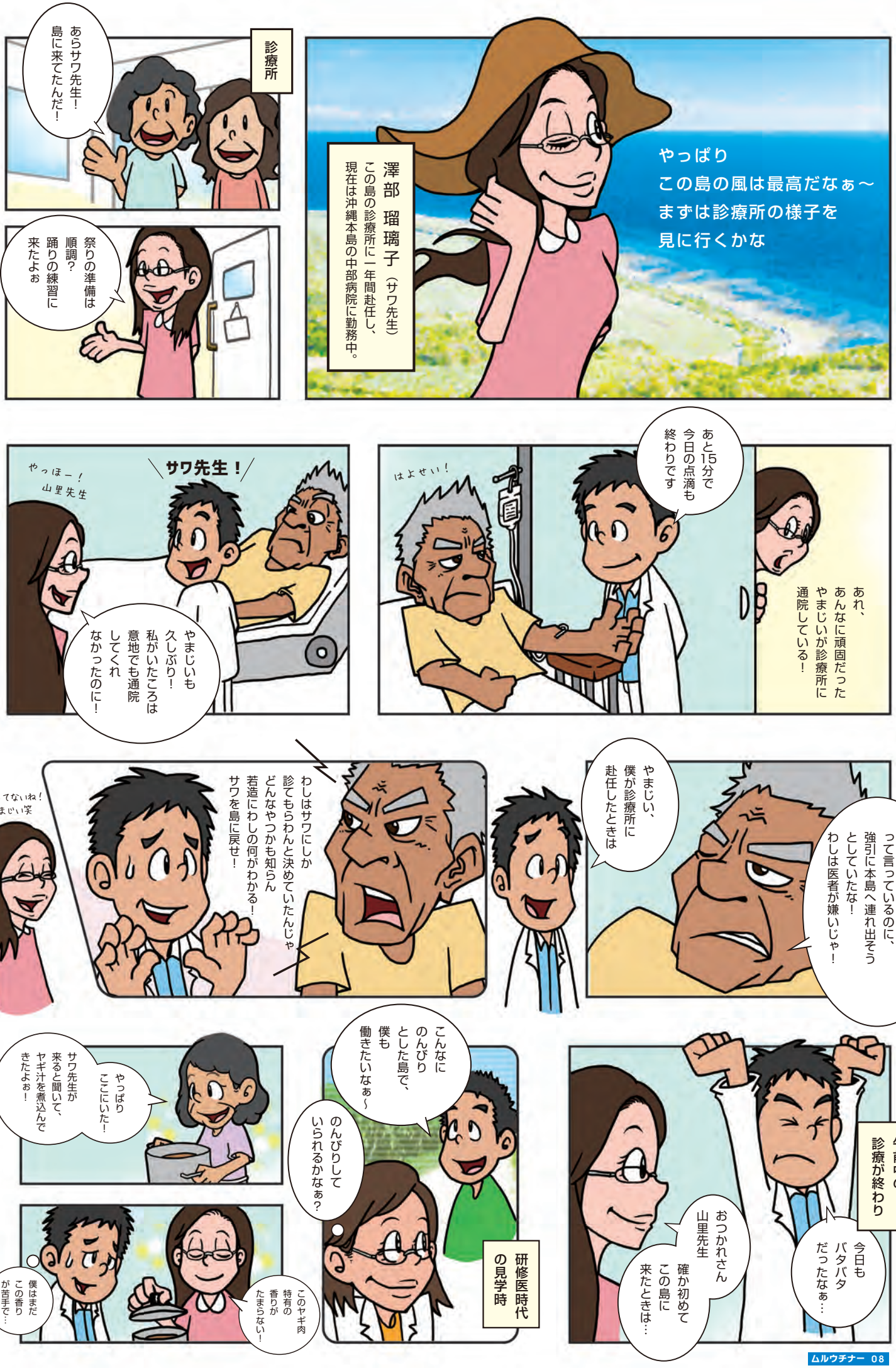
この島に来て一番感じたことは、
離島によって文化も暮らしぶりも島それぞれで違い、
医学知識だけではなく、
住民のみんなの生活自体に溶け込んでいかないと、
どう診療すべきかわからないという
難しさがあるということ

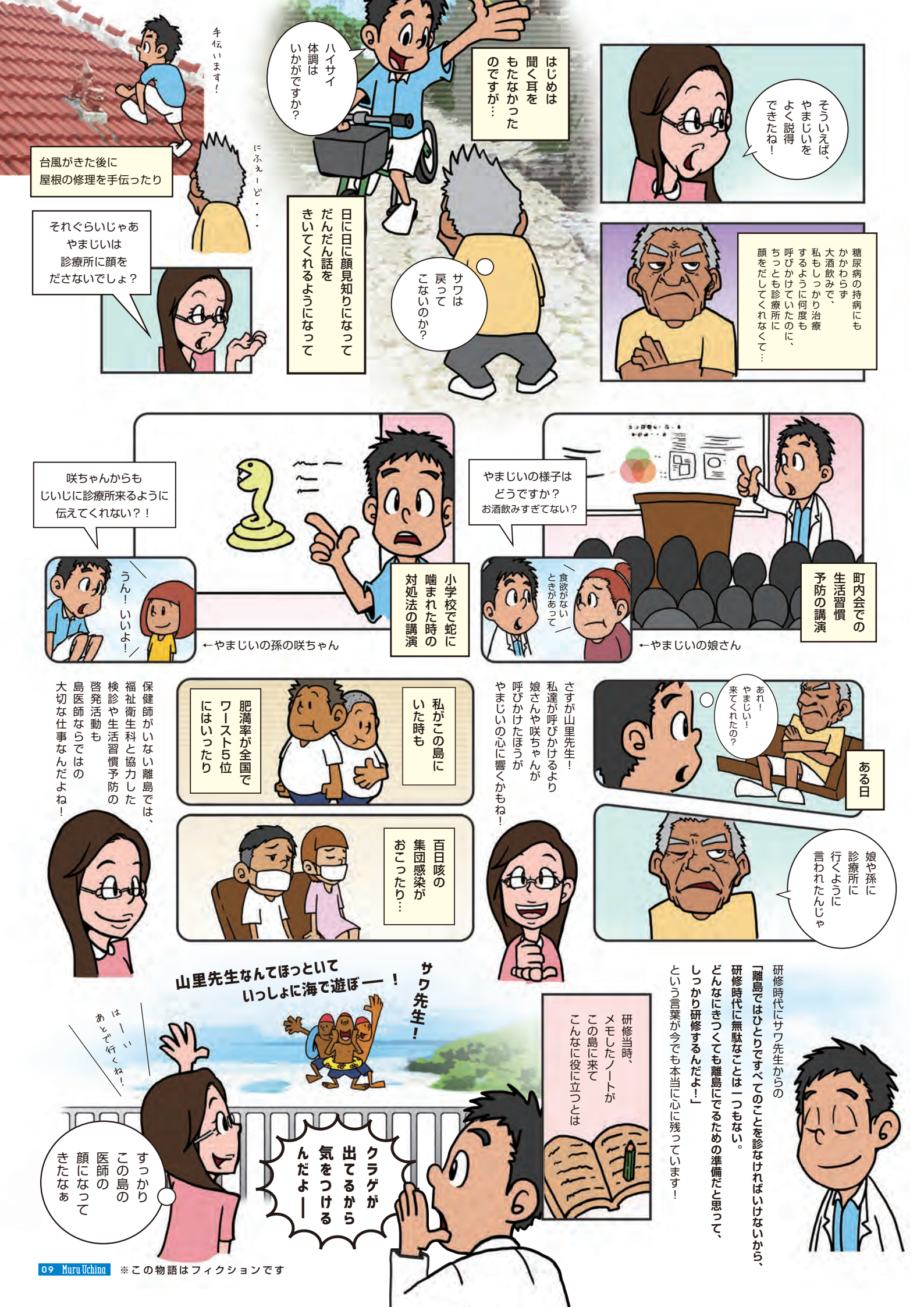






医師と患者ではなく
人と人として
心を通わせた診療が
島の住民の健康と
笑顔を守る！
僕はそう実感している


やっぱり
この島の風は最高だなぁ〜
まずは診療所の様子を
見に行くかな
澤部 瑠璃子（サワ先生）
この島の診療所に一年間赴任し、
現在は沖縄本島の中部病院に勤務中。
診療所
あらサワ先生！
島に来てたんだ！
祭りの準備は
順調？
踊りの練習に
来たよぉ
あと15分で
今日の点滴も
終わりです
はよせい！
あれ、
あんなに頑固だった
やまじいが診療所に
通院している！
サワ先生！
やっほー！
山里先生
やまじいも
久しぶり！
私がいたころは
意地でも通院
してくれ
なかったのに！
わしは忙しくて島を離れられん
って言っているのに、
強引に本島へ連れ出そう
としていたな！
わしは医者が嫌いじゃ！
やまじい、
僕が診療所に
赴任したときは
わしはサワにしか
診てもらわんと決めていたんじゃ
どんなやつかも知らん
若造にわしの何がわかる！
サワを島に戻せ！
変わってないね！
やまじい笑
午前中の
診療が終わり
今日も
バタバタ
だったなぁ…
おつかれさん
山里先生
確か初めて
この島に
来たときは…
研修医時代
の見学時
こんなに
のんびり
とした島で、
僕も
働きたいなぁ〜
のんびりして
いられるかなぁ？
やっぱり
ここにいた！
サワ先生が
来ると聞いて、
ヤギ汁を煮込んで
きたよぉ！
このヤギ肉
特有の
香りが
たまらない！
僕はまだ
この香り
が苦手で…



※この物語はフィクションです

OKINAWA Residents Story

沖縄の研修医の話。

INTERVIEW

沖縄県立
南部医療センター・こども医療センター
内科専攻医

山城 俊樹 先生
Toshiki Yamashiro

出 身 地：沖縄県
出身大学：琉球大学医学部地域枠2期生
（2015年卒）
大学卒業後、沖縄県立南部医療センター・こども医療センターにて初期研修を終え、引き続き同センターの内科専攻医研修プログラムで研修中。サブスペシャルティは循環器を専攻。

Hospital Data

沖縄県立
南部医療センター・こども医療センター

〒901-1193
沖縄県島尻郡南風原町字新川118-1
TEL：098-888-0123
http://www.hosp.pref.okinawa.jp/nanbu/

小児から成人、軽症から最重症まで、幅広い症例を経験

「ここでは小児から成人まで幅広く診られるため、ジェネラリストとしての力を身につけることができるんです」

そう充実した笑顔で語るのは、沖縄県立南部医療センター・こども医療センターの内科専攻医で、卒後3年目の山城俊樹先生だ。同センターは434床の急性期病院で、胎児期から成人までを対象とした、あらゆる疾患に対応できる全国でも数少ない機能を有した病院である。

山城先生は中学時代に軽い不整脈を起こし、病気について調べるうちに循環器内科医に興味をもった。循環器内科医になって沖縄の地域医療に貢献したいという思いから、地域枠で琉球大学に入学。卒業後は同センターで初期研修を行った。

「たとえば親戚の子どもが熱を出しているのに、小児は専門じゃないから診ることができないというのは医師としてどうなのかなと思ったんです。循環器内科の患者さんの多くは中高年であり、循環器内科医を目指す僕にとって小児を診る機会は研修期間しかありません。当センターでは小児から成人、軽症から最重症まで幅

循環器内科医として、そしてジェネラリストとして、沖縄の地域医療に貢献したい。

広い疾患を経験できると思い、研修病院に選びました」

実際に研修が始まると、当初思っていた“幅広さ”はそれ以上だった。救命救急センターでは24時間365日、1次から3次、小児から高齢者まで幅広い患者が運ばれてくる。ここでのファーストタッチによる経験は、ジェネラリストとしての確かな力と、医師としての自信をつけることができる。

ファーストタッチは、教育体制の充実があってこそ可能なことであり、山城先生は、「ここでは“研修医一人で患者さんを帰すな”ということが徹底されています。常に上級医の目が届き、守られているからこそ、積極的に経験を積むことができる。それに、疑問や間違いがあればその場で答え合わせができるため、とても勉強になります」と語る。

山城先生は医学生時代から常に学んだことをノートに書き留めている。医師になってから医学生時代に学んだことや経験したことに、どれ一つとして無駄なものはなく、活かされていることがたくさんあることを、日々実感している。

「医学生時代は学んだことや経験したことをちゃんと書いて残しておくことが大事。働き始めると、それがどれだけ役に立つのかを実感できるはずです。医学生のみなさんには、学びも、遊びも、一つひとつの経験を大切にして過ごしてほしいですね」

スペシャリストを目指しながらジェネラリストにもなれる

山城先生は初期研修修了後、引き続き当センターの内科専攻医研修プログラムで内科医としての研鑽を積みながら、サブスペシャルティとして循環器を学んでいる。

「当センターは、専攻医研修においても全科豊富なコモンディジーズを経験できるため、スペシャリストを目指しながら自然とジェネラリストになることができます。また、さまざまな分野でロールモデルとなる、尊敬し、憧れる先生方が多くいるということも引き続き残った大きな理由です」

山城先生は初期研修で座間味島における一人診療所の医療を経験した。離島では、その場で医療を完結させないといけない状況が多々ある。それは離島に限らず、沖縄県全体でも各医療圏内で完結させる医療が根付いているためでもあり、沖縄の医師にはジェネラリストとしての実力も求められる。

「初期研修から幅広い医療をどんどん経験し、ジェネラリストとしての実力を習得できるのは、沖縄県ならではだと思います。また、患者さんも研修医にとても協力的であり、沖縄は医師として大きく成長できる、これ以上ない恵まれた研修環境にあると感じています」

山城先生が目指すのは、離島の一人診療所でも質の高い医療を提供できる、ジェネラルな実力をもった循環器内科医になることだ。循環器疾患は緊急性が非常に高く、専門的な医療に乏しい離島やへき地に循環器内科医がいることは、住民にとって大きな安心である。近い将来、山城先生によって、沖縄のどこかの地で大きな安心が生まれ、たくさんの命が救われるに違いない。

モットー
敬意と尊敬の念をもって、患者さんに接する。

初期研修時代に地域研修で赴任した座間味島の風景。

連携や交流の多い神戸大学に訪問した際、立ち寄った神戸布引ハーブ園でのひととき。

OKINAWA DOCTORS SCENE

01 伊江村立診療所
Yoshihiro Abe

目の前で倒れている人を助けたい。理想とする救急医療を求めて辿り着いた島の医療

助けられなかった悔しさを胸に救急と外傷外科を追求する

伊江島は、沖縄本島北部にある本部半島からフェリーで約30分の洋上に位置する、人口4600人の離島である。阿部好弘先生は、この島で唯一の医療機関である伊江村立診療所の所長として、島民はもちろん修学旅行生や観光客の健康を守り続けている。

阿部先生の出身地は鹿児島県の奄美大島だ。「だからなのか、故郷に貢献しているような感覚なんです。患者さんも自分の家族を診ているようで」と、阿部先生は優しく微笑む。

阿部先生は大学卒業後、「目の前に倒れている人や困っている人

●伊江村立診療所 所長

阿部 好弘 先生

出身地：鹿児島県　出身大学：鹿児島大学医学部（1987年卒）

救急医、外傷外科医として救急医療の第一線で活躍。北部地区医師会病院では民間救急ヘリを運営する「MESHサポート」の立ち上げにも参加。2008年より伊江村立診療所の所長。24時間体制の診療で、1日の患者数は150～200人。乳児からお年寄り、急性期から慢性期まで幅広く対応する。

がいたら助けたい」という、医師としての当然の思いから救急の道に進み、小倉記念病院では自ら志願して外科手術の必要な救急患者を全て受け持つなど、外科医としても研鑽を積んできた。ある日、8歳の女の子がトラックにはねられ救急搬送されてくる。頭部挫創により脳神経外科医が対応したが、やがて内出血により全身状態が悪化。阿部先生が緊急手術をしたが助けることができなかった。

「とても悔しかったですね。専門の医師が多くいても、救急医療の質を上げなければ命を助けることはできないと痛切に感じました」

この出来事をきっかけに、阿部先生は理想とする救急医療を求め、救急と外傷外科の研鑽に明け暮れる。現場出動や洋上救急にも携わり、当時、日本にはなかったATLS（外傷コース）を香港で受講し、オーストラリアのリバプール外傷センターにも留学。北部地区医師会病院の救急部に赴任して、ドクターヘリを運営する「MESHサポート」の立ち上げにも参加した。そして2008年、阿部先生は伊江村立診療所の医師が辞めてしまうと聞き、自ら希望を申し出て伊江島に赴任した。

伊江島には医師として大切な医療の本質がある

伊江村立診療所には、医療資源に乏しいという離島医療のイメージは一切ない。2014年には透析センターが開院し、島内で透析医療ができるようになった。以前から透析センターを渇望する声はあったが、透析を診る医師が常勤している必要があるなど実現困難な状況が続いていた。阿部先生は村議会で意見を求められたとき、力強くこう言った。

「困っている人がいるならば、収支や予算に関係なくつくるべきです。自分が透析医療を学び、ずっと島に残りますから開設しましょう」

2015年には医療機器を備える救急搬送艇も導入し、これによってドクターヘリが直ぐに呼べない場合などでも緊急搬送が可能となった。さらに、阿部先生は医師教育にも力を注いでいる。赴任してから医学生や研修医の受け入れを積極的に行い、今では年間20人以上が伊江島の医療を学んでいる。

「ここでは有効な治療方法がなくなり、専門医の手から離れた患者さんも診ます。その人らしい生活や人生を実現するために、どのような治療やサポートができるのか。また、診察はカルテを見ながらではなく患者さんの目を見て会話をする。労いや感謝の言葉を自然とかけることができる。伊江島では、そうした医療人としての本質を学んでほしいですね」

阿部先生は医学部2年次から始めた空手を島民に教えている。研修医も共に空手の稽古に参加し、島の人々と食事会をして交流を深めている。数年後、再び島の医療を学ぶために訪れる医師も多い。阿部先生は、馬文化を復活させる村おこしのために馬主にもなった。島に来て覚えた水彩画は「沖展」で2年連続入賞した。阿部先生は故郷のように伊江島を大切にし、島の日々を楽しんでいる。伊江島は空も海も光にあふれ、阿部先生の表情もそれに負けないくらい明るく輝いていた。

阿部先生は、「この島からいらないと言われるか、後継者が現れるまでここで医師を続けていきたいです」と言う。後継者が現れたあとのことを聞くと、「医療の不便な場所に行き、困っている人たちを助けたい」と、大きく目を輝かせた。

伊江村立診療所　透析センター

Hospital Data

伊江村立診療所

〒905-0594
沖縄県国頭郡伊江村字東江前459
TEL：0980-49-2054
https://www.ritoushien.net/ie.shtml

島の空手同好会（写真：上）
馬文化を復活させる村おこしのために馬主に（写真：右）

OKINAWA DOCTORS SCENE

02 南部医療センター・こども医療センター
Mami Nakayashiro

沖縄の小児医療の発展に尽力。優れた小児科医を育成し、沖縄、そして日本の豊かな未来をつくる

沖縄県初の移行期医療支援、「成人先天性心疾患外来」を開設

中矢代真美先生は、沖縄県立南部医療センター・こども医療センターの小児科部長として、沖縄の小児医療の発展と小児科医の育成に尽力している。大学在学中に結婚、出産を経験し、卒業後は沖縄県立中部病院で研修を行い、小児科の道に進んだ。そのきっかけとなったのは、小児科実習で見た子どもたちの笑顔だった。

「病気で辛いにも関わらず、子どもたちは明るい笑顔でした。それを見たとき、子どもたちと家族を全力でサポートすると決めたんです」

●南部医療センター・こども医療センター
小児科 部長

中矢代 真美 先生

出身地：大阪府　出身大学：岡山大学医学部（1993年卒）

大学卒業後、沖縄県立中部病院にて研修。沖縄県立宮古病院、沖縄県立中部病院の小児科を経て、米デンバー小児病院へ留学。帰国後、沖縄県立中部病院、沖縄県立南部医療センター・こども医療センターにて小児循環器医療の第一線で活躍。2018年4月より同センターの小児科部長。

中矢代先生は、我那覇仁先生（現・沖縄県病院事業局長）に誘われ、小児循環器を専門に研鑽を積む。米デンバー小児病院へ留学し、帰国後は沖縄の小児循環器医療の発展に貢献してきた。

同センターの小児科では産婦人科と連携をしながら、出生前診断によって先天性異常が見つかった場合、出産後、直ちに適切な治療を実施して多くの命を救っている。先天性心疾患も救命率が向上し、多くが成人を迎えるようになったが、成人期の新たな病気には小児科での対応が難しい。そこで、成人までのスムーズな移行期医療を確立するため、中矢代先生らが中心となって、同センターに沖縄県初の「成人先天性心疾患外来」を2018年6月に開設した。

「子ども時代に受けた治療を知らない方もいますし、成人期の病気や、妊娠、出産の危険性など、年齢を重ねるごとに問題が生じてくるため、継続した診療や教育も必要です。また、沖縄には日本復帰前後に本土で心疾患手術を受けた子どもたちが300人以上いるとされ、この方たちの診察もこの外来における重要な役割です」

国も移行期医療の支援体制構築を推進しており、「成人先天性心疾患外来」は沖縄県における移行期医療のロールモデルとなるだろう。

「子ども時代に県外で心臓手術を受けた方がおりましたら、お気軽に相談に来てくれたらと思います」と中矢代先生は言う。

島で1人でやれる小児科医の育成

中矢代先生は小児科研修の責任者でもあり、小児科医の育成にも力を注いできた。〝島で、最低1年、1人でやれる小児科医〟を研修理念とし、専攻医は離島研修に備え、救急、総合診療、新生児、集中治療、各臓器専門診療を満遍なく回り、専門分野から診断のついていない初診患者まで多くの症例を経験する。

「論文も早い段階から取り組むなど新専門医制度にもしっかり対応しています。さらに海外経験のある医師も多く在籍し、米軍病院と英語による合同カンファレンスやハワイ大学留学制度など、海外を目指す医師にも魅力的な研修環境です」

2006年の開院以来、これまで55名の小児科医が育ってきた。沖縄や県内の離島で活躍する医師たち、救急、集中治療、血液腫瘍、感染症、精神、放射線など、全国のさまざまな小児医療で活躍する医師たち、そして海外の大学で研鑽を積む医師や発展途上国の医療に従事している医師もいる。

「ここで育った小児科医の多くが、『1人でやれる基礎力を身につけたことが大きく活かされている』と言います。当院でなら目指すキャリアに繋がる確かな力を習得できるはず。また出産、育児のある女性医師には働き方の融通も利きますし、全力でサポートしますので安心してください」2人の子どもを育てながらキャリアを積んできた中矢代先生の言葉は力強い。

日本は少子高齢社会に突入したが、沖縄県の出生率は全国平均の2・4倍と高く、小児科医として研鑽を積むに最適な場所といえる。同センターが開院してまだ12年。中矢代先生の指揮のもと、発展し続ける同センターの小児科から多くの小児科医が巣立ったとき、沖縄のみならず、日本社会全体が明るく豊かなものになるだろう。中矢代先生は自信と誇りをもってこう言う。

「未来をつくるのは子どもたちです。子どもたちを無事、成人にまで育てる小児科医の役割は、病気を治すことだけではなく、日本の未来をつくる重要な役割も担っているのです」

Hospital Data

沖縄県立

南部医療センター・こども医療センター

〒901-1193
沖縄県島尻郡南風原町字新川118-1
TEL：098-888-0123
http://www.hosp.pref.okinawa.jp/nanbu/

Muru Uchina Test

ムルウチナー検定

答え欄

Q.01 沖縄の方言で「くわっちーさびたん」とは標準語にすると…？

A いただきます　B ごちそうさま　C かんぱい

Q.02 「かりゆしウェア」の「かりゆし」の意味は？

A めでたい　B 清清しい　C おおらかな

Q.03 沖縄を代表する「奇跡の1マイル」と呼ばれる通りは？

A ひめゆり通り　B 国際通り　C 平和通り

Q.04 伊江島と本島を行き来するカーフェリー「いえしま」の乗船定員は？

A 363人　B 474人　C 626人

Q.05 沖縄の県花「デイゴ」の花言葉は「夢」、「活力」、あと一つは？

A 幸せ　B 努力　C 生命力

Q.06 2018年全国高校野球選手権、沖縄大会決勝で興南高校と対戦した高校は？

A 北山高校　B 糸満高校　C 嘉手納高校

Q.07 沖縄には世界遺産がいくつある？

A 3つ　B 6つ　C 9つ

Q.08 平和記念公園で開催された「ひまわり畑の迷路」。どこ産のひまわりの種？

A 北海道産　B 福島県産　C アメリカ産

Q.09 琉球大学出身のお笑い芸人は？

A ダチョウ倶楽部・肥後　B スリムクラブ　C 小島よしお

Q.10 沖縄県浦添市の地名「勢理客」。この読み方は？

A ぜりちゃく　B ぜいりこ　C じっちゃく

正解が0〜3問 未来のうちなんちゅ

正解が4〜6問 THEうちなんちゅ

正解が7〜9問 スーパーうちなんちゅ

全問正解 ミラクルうちなんちゅ

答え

Q1.Bさちそうさま / Q2.Aめでたい / Q3.B国際通り / Q4.C626人 / Q5.C生命力
Q6.B糸満高校 / Q7.C9つ / Q8.B福島産 / Q9.Bスリムクラブ / Q10.Cじっちゃく

Muru Uchina

ムルウチナー

オール沖縄で
医師のキャリアを考えるマガジン

「Muru Uchina（ムルウチナー）」第6号をお届けしましたが、いかがでしたでしょうか。
沖縄県地域医療支援センターは医師の地域偏在解消を目的とする組織です。
この冊子で少しでも私たちの想いをお伝えすることができれば幸いです。
ご意見・ご感想などお待ちしております。

発　行

沖縄県地域医療支援センター

Okinawa Community Medicine Support Center

〒903-0215
沖縄県中頭郡西原町字上原207番地
おきなわクリニカルシミュレーションセンター内
TEL：098-895-1225
E-Mail：chi@w3.u-ryukyu.ac.jp

http://www.chi.med.u-ryukyu.ac.jp

ムルウチナー バックナンバー

vol.05

vol.04

vol.03

vol.02

vol.01

編集制作

【民間医局】株式会社メディカル・プリンシプル社

ディレクター・デザイン：勝又シゲカズ　文：田口素行　撮影：小山英樹
マンガシナリオ：野火止エイタ　イラスト：伊藤タケマル

オール沖縄で医師のキャリアを考えるマガジン

Muru Uchina

ムルウチナー

2018 Summer Vol.06

沖縄県地域医療支援センター
Okinawa Community Medicine Support Center

〒903-0215 沖縄県中頭郡西原町字上原207番地
おきなわクリニカルシミュレーションセンター内
TEL：098-895-1225
E-Mail：chi@w3.u-ryukyu.ac.jp

http://www.chi.med.u-ryukyu.ac.jp

沖縄県地域医療支援センター